

11 白船

イングランド王ヘンリーI世 — 1120年11月25日

この物語を語れるものはわしひとり  
ルーアンの屠畜屋<sup>とちくや</sup> 貧しいベラルド  
(陸を治めるは玉座の王)  
王の一行が船出した  
この物語を語れるものはわしひとり 5  
(海を治めるは神のみ)

ヘンリー王が生涯かけて手にした領地  
王の死後には王子が相続すべきもの

わしが若い頃 世の中はそういうものだった  
年をとっても記憶は確か 10

イングランドを治めるヘンリー王  
その方はまたノルマンディー公爵ヘンリー

二つの領地で「碩学<sup>せきがく</sup>ヘンリー」が王の自慢  
だが 時は移ろうもの

数知れぬ無慈悲な闘いの末 15  
自らと息子のため 王は王冠を勝ち取って  
己<sup>おの</sup>が兄の目をくり抜いた

王の一行が狩りに出かけると  
貧しい農夫たちは道に鋤<sup>すき</sup>を投げて叫んだ  
「わしらの願いは 王ではなく神に届きますように」 20

だが イングランドの貴族たちは  
<sup>ひざまず</sup> 跪き 王子の手に口づけした

王は王子を連れてフランスへ渡り

ノルマン人から忠誠を求めた

ノルマンディーの貴族たちも皆  
王に忠誠の誓いをたてた 25

誓いがたてられ 印も押されて  
王と王子が国に戻る日がやってきた

クリスマスの華やぎは里心を募<sup>つ</sup>らせる  
そう クリスマスはもうじきだった 30

誉れ高い水夫 勇敢なフィッツ・スティーブンが  
王のもとへやってきた

衆目を集める中 差し出したのは  
王への忠誠の証たる金印

「王様 私の父が舵をとった船から 35  
お父上の征服王ウィリアム様は降りられて  
足を滑らせ イングランドの土をひと掴<sup>つか</sup>み

そして言われたのです 『このひと掴<sup>つか</sup>みの土をもって  
これより先 わしはイングランド全土を治める』と

ウィリアム様の生まれ故郷はノルマンディー 40  
船首には射手が彫刻されておりました

ウィリアム様の王子たるあなた様 そしてお孫様を  
イングランドへお連れするのは私の役目

その誉高き白船は 今では私の持ちもの  
アルフラーの港から今日にも船出いたします 45

そのマストには ノルマン人の槍を飾る旗が付けられ  
五十人の腕利きの水夫も乗っております」

王は言った 「わが船団は選りすぐり  
だが スティーブンの息子に否とは言えまい

王子と王女と家臣たちを白船に乗せ  
海を渡ってくれ」 50

よい  
宵の南風に乗って 一足先に  
王はノルマンディーを船出した

王子と家臣たちの華やかな一行は  
白船に乗り込み船出を待った 55

高貴な貴族 美しい貴婦人  
宮人も水夫もそこに集い  
三百人もの集団だった

王子に付き添う一行の中で  
わしベラルドは最も身分卑しいもの 60

王子は恥知らずの戯<sup>たわ</sup>けもの  
慈悲を忘れて 王の股間から生まれ出た

今や 王子は十八歳  
生まれついで性の悪も十八歳

王子は言った 「船倉<sup>ふなぐら</sup>から酒を持ってこい  
船出の前に 水夫たちと酒盛りだ 65

「夜中に港を離れても  
速度をあげれば 父の船には追いつくさ」

漕ぎ手たちは歯止めなく大騒ぎ  
紳士淑女も王子の手招きに従った 70  
夜は明るく 甲板では皆が乱痴<sup>らんちき</sup>気騒ぎ

真夜中の鐘で 港を離れ  
白船は水を切って進んでいった

帆が張られ オールは調子を合わせて  
船と月との二重走 75

白船は飛ぶ飛ぶ  
その様はまるで 死者から抜け出た魂が飛び去るよう

白船はユリのように白く輝く  
その様はまるで 海をゆく幽霊船

王子は言った 「家臣たち さあ うたえ 80  
鳴き鳥ツグミに負けるでないぞ」

天にひしめく冬星の下  
日焼けした喉から白い喉から 陽気に元気に  
一行は声はりあげた

歌 いや 空を裂く金切り声 85  
海の底から湧き上がる悲痛な叫び  
三百人の死の雄<sup>おたけ</sup>叫びの大合唱

衝撃を感じて 一瞬 叫び声がした  
船の竜骨が隠れた岩に当たったのだ

先行く王の船団は 遠くで 鋭い奇妙な吐息を聞いた 90  
だが それが何かは解らなかった

<sup>だりん</sup>  
舵輪の側には青ざめたフィッツ・スティーブン  
その周りには 波に飲まれゆく人々

波に飲まれゆく偉大な王の世継ぎ  
<sup>だりん</sup>舵輪の側には青ざめた<sup>すべ</sup>術なき水夫 95

切り立った岩に不意打ちをくらい  
あっけなく 船も大波に飲まれた

杯を水に沈めれば 周りに渦が巻くように  
船の周りで大海は渦を巻いた

一瞬 スヴィーブンは茫然自失 100  
次の瞬間 混乱の中で王子を<sup>つか</sup>掴み

小舟を切り離すと 王子はそれに飛び乗った

近くにいたわずかの家臣も飛び乗った

「漕げ 海は静かだ 月は明るい」

「何を言う このものたちと私だけが助かるのか」

105

「漕げ 死にたくなければ船を漕げ さもなくば全滅だ」

息も絶え絶えの白船を逃れて

大渦に取り巻かれ 波が襲う白船を逃れて

必死の形相でオールを素早く漕ぎだした

その時だった 砕けゆく波の縁で

110

王子の妹が彼に叫んだ

必死でオールを漕ぎながら 王子は目を上げ

逆巻く波の向こうに妹の顔を見た

残された人々はぐらつく甲板にしがみついていた

その様はまるで 蠅が壁にへばりつくかのよう

115

このわし ベラルドも 側でしがみつ

救いを祈り 恐怖に<sup>おのの</sup> 慄いていた

だが 妹を見た時の 王子の目はしかと見た

妹の顔をみとめ 叫びを聞いて

王子は言った 「引き返せ 王女を死なせてはならぬ」

120

船を引き戻す渦に乗って 一行は引き返した

その様はまるで 水車に引き込まれる枯葉のよう

浮かぶも<sup>きび</sup> 厳しい 激しく揺れる白船の下で

王子は揺れる小舟から立ち上がった

惨めにも 白船は大きく傾いていた

125

むきだしの竜骨の上を滑り落ちるかのように

妹はなんとか兄の側へやってきた

王子は下からオールを差し出し  
王女を掴もうと 腕に力を込めた

白船から小舟を見た人たちは  
「助かった」と口々に叫んだ 130

小舟めがけて 次々に飛び降り  
井戸に投げたつるべのように ぐるぐると小舟は回り  
波が押し寄せ うねりが起きた

ゆくゆくは王となるはずの王子は  
一瞬のうちに 運命の波に飲み込まれた 135

イギリス全土が膝を折って忠誠を誓ったあの王子  
ノルマン人が忠誠を誓ったあの王子

強欲と高慢のあの王子  
死ぬまで 徳の片鱗も見せなかったあの王子 140

王になっていたならば 必ずや  
農民たちを鋤につないで 領地を耕させたはず  
今や 行き交う船が 王子の上で波の轍を刻んでいる

王子の魂が目覚めた場所は 神のみぞ知る  
だが 妹を助けた王子の死に様は わしがこの目で見届けた 145

この物語を語れるものはわしひとり  
ルーアンの屠畜屋 貧しいベラルド  
(陸を治めるは玉座の王)

王の一行が船出した  
この物語を語れるものはわしひとり 150  
(海を治めるは神のみ)

来るべき最後の審判の日のように  
生命育む大海原の只中に 今や最期の時がきた

もはや 祈りも虚しく呪いも虚しく  
白船は大海原の只中に砕け果てた 155

人であろうと 船であろうと  
波にのまれて海の藻屑

このわし ベラルドも海に沈んだ  
荒唐無稽こうとうむけいに聞こえるだろうが  
思い出すと その時の夢はこうだった 160

港へ戻る船を朝日が照らす時  
アルフラーの浜辺で陽気な呼び声がする

オンフラーに声こだまする 楽しい夕暮れ  
母は子に帰るようにと声かける

ルーアンの教会の鐘が鳴り響き 165  
キリストの遺体が通りを行く

海の底でたった一人気を失った瞬間に  
こういうことをわしは見た

目覚めた時 海の上にいるのは夢  
海の底で見たのは現うつと思われた 170

船も人も消え去り  
波はうねり 月は輝いていた

わしの腕がしっかり掴つかんでいたのは  
マストから折れた帆桁  
だが もう一人がその帆桁つかを掴んでいた 175

薄暗い海と空の下 島影は何もない  
男とわしは名乗りあった

「私はゴードフルワー・ド・レーグル  
礼帯を許された騎士の息子」

「わしはベラルド 屠畜屋とちくやの息子 180  
ルーアンの街で 屠畜とちく なりわいを生業なりわいにしております」

寒い冬の海を漂いながら  
二人で神に祈った

だが見よ もう一人が波の上に現われた  
「神様 われら三人をお救いください」 185

三番目の男は喘ぐ<sup>あえ</sup>ような目つきで帆桁<sup>つか</sup>を掴んだ  
その男こそ かのフィッツ・スティーブン

帆桁<sup>つか</sup>を掴んで彼は言った 「王子はどこに」  
「溺死された」 「なんということ」  
そうして彼は手を離し 海の底へと沈んでいった 190

広い海で 再び二人っきり  
残されたもの同士 向かいあった

時が過ぎ お互いに  
生きていても死んでいるとも分からなかった

頭上の静かな星々は 195  
死んだ二人を見ているかのようだった

数時間が過ぎた 騎士の息子はため息ついた  
「あなたに神のお恵みを 私は力尽きてしまった

さらば 友よ もうだめだ」  
「キリストのご加護を」とわしは呻き 彼は逝った 200

三百人が死に わしだけが生き残った  
たったひとりで海を漂った

ようやく 海の上に朝が来た  
その様はまるで わしに向かって羽ばたいてくる天使の羽根のよう

羊皮の外套をまとったわしの感覚は麻痺していた 205  
意識はなく 死んだように帆桁に手をかけていただけ  
太陽の温もりで目が覚めた時 釣り船の中にいた



太陽はすでに東の空高く昇っていた  
その瞬間 わしは神に祈り感謝した

その日 起こったことを司祭に話すと 210  
罪が許されるまで  
このことは胸にしまっておくように と命じられた

司祭と共に出かけたのは  
ウィンチェスターのヘンリー王の城

王の侍従はすべてを聞くと 215  
彼は何度も何度も嘆き涙した  
その様はまるで 我が子が殺されたかのよう

その時 わしの周囲を素早く囲んだのは  
<sup>けわ</sup>険しい顔をした貴族たち

このことを いったい誰が 220  
<sup>あるじ</sup>主たる王に勇気を持って語れるのか  
彼らが相談している間 わしはひどく辛かった

王はひどく心乱れて 寝ずに待つこと丸二日  
そして三日目のことだ

王は家臣たちに何度も尋ねた 225  
「王子は<sup>なにゆえ</sup>何故こんなにも遅いのか」

「港は海峡沿いに あちらにもこちらにも  
いずれも はるか遠くにございます

イングランドの白亜の崖は  
イングランドの女たちの肌の白さにはかなわず 230  
その空は 彼女たちの青く輝く瞳にはかないますまい

フランスからどこかの港に辿り着き  
遊びにかまけておいででしょう」

だが 王は尋ねた 「遠くに聞こえたあの叫びは  
空と海の狭間<sup>はざま</sup>で聞いたあの叫びは何だったのか」 235

ひとりが答えた 「はい あれは  
猟師が網を仕掛けるときの叫び声」

もうひとりが答えた 「鷗<sup>かもめ</sup>が雛を巣から見失って  
叫び声で探していたのかもしれない」

家臣たちは 王の心をなだめて 240  
思いつくまま あれやこれやと言葉を並べた

しかし今日 誰がこのことを話すのか  
王だけが知らぬこの事実を

家臣たちは知恵をめぐらし ひとつ方法を思い付き  
その日 玉座の周りに集まった 245

王は何も語らず 何も聞かず  
ただ心乱れて座っていた

その時 広間の向こうに王が見たのは  
金髪の少年

浜辺に咲いて 波の口づけを受ける 250  
金色の芥子<sup>けし</sup>の花のように輝いていた

だが その頬は春の山査子<sup>さんざし</sup>のように青白く  
衣装<sup>からす</sup>は鴉の羽根のように漆黒だった

家臣たちは皆おし黙った  
聞こえるのは 広間を<sup>おごそ</sup>厳かに歩く少年の足音だけ 255

驚いた王は言った 「いったいこれは  
誰が私に黒衣の少年を遣わした

少年よ なぜ広間を<sup>おごそ</sup>厳かに歩いてゆく  
まるで葬儀でもあるかのように」

少年は玉座の前で 跪<sup>ひざまず</sup>き 260  
涙をためて 王を見上げた

「ああ 王様 なぜ黒衣をと 訝<sup>いぶか</sup>られましょう  
今日は 白が死の色だからです

「王子様とお付きの方々は  
白船とともに海の底においでです」 265

ヘンリー王は突然 死んだように倒れた  
次の日 わしが事の真相を話した時には  
ものも言わず ベッドからじっと宙を見ていた

長い時間がかかるだろう  
王の御心<sup>みこころ</sup>が慰められて その微笑みが戻るまで 270

長い時間がかかるだろう  
統治を喜び 御代<sup>みよ</sup>を誇りと思われるまで

だが 王は二度と微笑むことはなかった

この物語を語れるものはわしひとり  
ルーアンの屠畜屋<sup>とちくや</sup> 貧しいベラルド 275  
(陸を治める玉座の王)  
王の一行が船出した  
この物語を語れるものはわしひとり  
(海を治めるは神のみ)

(中島久代訳)